

氏名	久 葉 春 彦
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	博乙第 2028 号
学位授与の日付	平成元年 9月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者(学位規則第5条第2項該当)
学位論文題目	骨移植による臼蓋形成術を併用した全人工股関節置換術の臨床的 ならびにX線学的研究
論文審査委員	教授 寺本 滋 教授 折田薫三 教授 平木祥夫

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

変形性股関節症に対して骨移植による臼蓋形成術を併用した全人工股関節置換術(THR)を44例46股に施行し、術後1年以上経過追跡した38例40股について臨床的およびX線学的に評価検討した。臨床評価では、日整会变股症判定基準で総合点術前平均41.3点が術後1年で84.6点と改善され、最終追跡時では84.1点とやや低下していた。線学的評価では、Sharp角は術前平均44.5°が術後平均33.3°となり、ソケットの設置角度は平均41.5°とほぼ理想的に設置されていた。術後骨頭中心の位置は正常側骨頭中心よりもやや内側寄りやや高位となっていた。大腿骨はほぼ正常の位置まで下げられ、脚長差は是正されていた。移植骨としては摘出大腿骨頭か腸骨を用い、移植骨の癒合は術後3ヶ月でほぼ完成しており、吸収をみるものでは骨釘の頭の部分のみであった。ソケット側の骨透亮像はstageⅢ以上に進行したものはなく、ステム側の骨透亮像はCharnley-Müller型でstageⅢ、Ⅳ合わせて20%に見られ、再置換例はステムのゆるみによる1例だけであった。臼蓋形成不全の症例に対して骨移植による臼蓋形成術を併用したTHRは有用な方法であると考えられた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は人工股関節置換に関する臨床的研究であるが、変形性股関節症症例に対して骨移植による臼蓋形成術を併用した全人工股関節置換術を施行し術後1年以上経過した38例40股について臨床的およびX線学的に評価検討したものである。その結果、本手術の有用性を立証したものであり価値ある業績であると認める。

よって本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。